

「総合」軸に各教科を関連付け

未来をリードする人育む「カリマネ」

カリキュラム・マネジメントの視点に立ち、教科等横断的な授業実践に力を入れている川崎市立川崎高等学校附属中学校(和泉田政徳校長、生徒359人)。生徒育成に関わる目標「未来をリードする人」の実現に向け、総合的な学習の時間を軸に各教科等と関連付けながら学習活動をスパイラルに展開している。一人1台のタブレット端末など、ICT機器に関して充実した環境にある。デジタル作品などの学習履歴を生かした評価の工夫にも取り組んでいる。

川崎市立川崎高等学校附属中学校



タブレット端末を使いグループで話し合う生徒ら①、スクリーンに映像を提示するなど、うまくICTを活用している②



タブレット端末を使い、電子黒板機能付きのスクリーンに映像を提示するなど、うまくICTを活用している。生徒たちは「でもさ…」という反論の声が上がると、これらは、3年国語科のそれを基にスマートフォン「話すこと・聞くこと」領域

自主的な利用で学び広げる



木原 俊行 大阪教育大学教授

例えば、美術科の絵画の鑑賞の授業では、ある部分に着目してタブレット端末を使って拡大する「インターネット」を検索にかけて画家の経歴を探るなど、生徒の取り組みが「多様化」していた。教師たちは生徒を信じ、彼らが自主的にICT機器を使うことを認めている。そのスタンスが学びの充実をもたらしている。

同校の実践から学ぶべき点がもう一つある。それは「カリキュラム・マネジメント」である。ICT機器のメリットの一つは、教師たちがこれまで扱った教材などを蓄積し、共有できることである。

社会の学習内容、国語で議論 ▶ ディベート力、英語に生かす

域の授業。論題は「川崎市では中学生のスマートフォン所持を義務化する。是か否か」。生徒たちは賛成派と反対派、ジャッジ役のグループに分かれ、残りの生徒はオーディエンスとして議論の行方を見守った。

この授業は、社会科の公民的分野で扱った「直接請求権」の学習を生かし、ディベートを行うというものである。授業を行った研究主任の久保田聡子教諭は「人を説得する話し方に加え、こうした話し方ができているかどうかを聞き取る力を付けること」を目標に設定した。ここで学んだことは、その後の英語科のディベートにもつながっていくという。

三つの力設定
カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえ、各教科等との関連を図った授業づくりは、同校の特色の一つになっている。

「生徒が身に付けた力が学習にどう生きるか」と位置付けた。

こうした発想は、「総合的な学習」の取り組みが軸になっている」と話す久保田研究主任。担当教科が違っても「総合的な学習」は学校全体で関わっていくことになるためだ。

キーワードに置くのは「LEAD」。「Learn(学ぶ)」「Experience(体験)」「Action(行動)」「Dream(夢)」の頭文字から名付けたもので、グローバルに活躍できる生徒の育成を目指している。そのため、「総合的な学習」を「LEADタイム」と位置付けた。

「生徒が身に付けた力が学習にどう生きるか」と位置付けた。

ICT活用力重視、機器を充実

同校は平成26年4月、市会を生きる上で必要な力を育むために、大切にしていることの一つが「ICT活用力重視」である。一人1台のタブレットなど、ICT機器の環境は

充実している。

昨年度からは(公財)パナソニック教育財団の特別研究指定校として研究を進めている。テーマは「未来をLEADする人材育成のためのカリキュラム・マネジメント」。本年度は、学校独自に設定した三つの力を評価するルーブリックのたたき台を作るなど、新しいことにも挑戦している。

また、幅広く情報活用能力を見取っていくために、「キーボード入力」「インターネットを使った情報検索」「プログラミング」などの調査項目を増やした。1学期と来年2月に実施する調査結果を比較し、「生徒自身の情報活用能力への意識」と「パフォーマンス」との関連も検討する方針。

附属中 044・24 6・7861